

海外学生派遣事業 終了報告書

文化科学研究科 比較文化学専攻 玉山 ともよ

1

海外派遣国： アメリカ合衆国

海外派遣先大学： University of New Mexico(ニューメキシコ大学)

海外派遣先学部： Department of Anthropology (人類学部)

海外派遣期間： 平成 18 年4月 19 日～同年5月17日

2 海外派遣先大学について

ニューメキシコ大学はニューメキシコ州アルバカーキにあり、州内で一番大きな大学で学生数は2万6千人を超える。大学内のほとんどの建物はプエブロ様式のアドビスタイルで統一されており、それが又大学の外観の大きな特徴となっている。

(参考：<http://www.unm.edu/about.html>)

巨大なキャンパスの中でもとりわけメインの図書館である Zimmerman Library は蔵書が非常に豊富であるが、滞在期間中の4月 30 日未明に火事が発生し、以後利用不可能となった。それにより地下にある多くの政府関係資料等が焼失してしまっただけでなく、PCB などの薬品汚染の可能性もあるとのことで、6月5日現在でも図書館はいまだ閉鎖されている。

派遣受け入れ先の人類学部には博物館である Maxwell Museum が併設されており、博物館にも多くの先住民関連資料およびコレクションが収蔵されている。私の派遣受入先指導教官である Dr. Beverly Singer は人類学部とアメリカ先住民研究を行う学部の両方に所属しており、メインの図書館が閉まってからは主にアメリカ先住民研究学部内の図書館を利用させていただいた。Dr. Singer は、サンタクララ・プエブロ出身で主に先住民女性の文化に関するビデオおよび映画製作研究の専門家で、滞在中は学期末でお忙しいにもかかわらず大変親切に対応して下さいました。よって彼女のご尽力で人類学部を通じて今後3年間利用可能な大学の Net ID(大学関係者のみのコンピューターアクセス権)を、費用の自己負担なしに取得することができた。そのことによって大学内でのコンピューターが利用できるようになっただけではなく、IDを利用すると日本に帰ってからも UNM の WEB サイトにログインでき、オンライン上で資料の検索等を行うことができるようになった。

滞在期間中常時大学の施設を利用することができ、図書館の火事という滅多に起こらない事態が発生したが、フィールドワーク中文献調査を行う上で大きな助けになり、人類学部ならびに Dr. Singer に大変お世話になった。

3 海外派遣前の準備

今回のフィールドワークは、博士論文との兼ね合いおよび修了までの計画において、第1次の初期調査として位置付け、今後より長い期間調査を行う上での準備段階という意味合いが強かった。調査が果たして実行可能なものであるかどうかを確かめる上での重要な予備調査であったとも言える。海外派遣先情報の入手方法としてはインターネットを利用し、実際には指導教官の岸上伸啓教授にニューメキシコ大学の考古学専門の教授 Dr. Lawrence Straus を紹介していただき、Dr. Straus より同大学の Dr. Singer を紹介していただいた。

なぜこの派遣時期を選んだのかについては、受け入れ教官の Dr. Singer が夏学期以降、国内研修に出まわられる可能性があったためである。よって5月初めまでの春学期期間中にフィールドワークを行いたいと考えた。

海外派遣事業申請から派遣出発までの期間が非常に短かったので、語学の準備やビザ取得のためには何も行ってはいない。(またアメリカ合衆国へ渡航するにあたっては、3ヶ月以内であればビザを取得する必要はなかった。)

4 海外派遣中の勉学・研究

滞在期間中、前半は主に文献資料調査のために図書館へ通った。しかし図書館が火事になってからは一時文献調査を中断せざるをえなかった。メインの図書館が使えなくなりましたので、仕方なく別の小さなアメリカ先住民研究学部の図書館を利用させていただいた。

授業を登録、受講することは一切しなかった。受け入れ教官の Dr. Singer より課題のようなものを与えられることも一切無かった。

そして4月29日から5月1日までの3日間は、私が修士を終えたユタ州立大学 Utah State University へ赴き、合衆国南西部先住民の被曝問題について元の指導教官 Dr. Barre Toelken より研究に関するアドバイスを請うた。

ユタよりニューメキシコへ戻った後は既にメインの図書館が使えなくなっていたが、偶然にもアコマ・プエブロの友人より紹介してもらった独立研究機関 Southwest Research and Information Center (SRIC) が、私の関心のある先住民の放射能被曝について先駆的な研究を行っているということがわかり、滞在期間中後半はその施設を利用させていただくようになった。この研究所は1971年設立以来、主にニューメキシコにおけるエネルギー分野の環境コンサルタント業務を通して特に放射能汚染の問題を訴え続けてきた。この州には広島・長崎の原爆製造で有名なマンハッタン計画のロス・アラモス国立エネルギー研究所と、サンディア国立科学実験所があり、これらに代表されるように、全米でも群を抜くほど多くの軍事関連施設がニューメキシコに存在する。よってウラン鉱山関連のみならず軍事施設よりの放射能被曝問題が過去多く発生しており、SRIC は放射能性廃棄物の不法投棄などの問題を市民セクターとして研究し啓発活動を行っている。(参考: <http://www.sric.org/>)

私はその所長である Dr. Pawl Robinson が、ラグナ・プエブロ保留地内ジャックパイルウラン鉱山閉山後の連邦政府等により発行された最終処理報告書の中の一部執筆者であることを知ってインタビューを行った。また彼の好意により、同研究所保管の新聞記事切り抜き資料、関連 DVD、図書館資料をコピーさせていただいた。

私の調査が可能であるかどうか、また地元先住民の人々にとって有益なものとなり得るかどうかについても同氏にうかがった。それでナヴァホ関連の言説や研究は数多く見られるが、ラグナは人口規模も5千人とナヴァホと比べると一桁以上も小さく、トライブ政府による閉山後の鉱山埋めたて事業が終了した後は、ほとんど継続的な調査報告は見られないので、鉱山に関連した人々へのインタビューを行い、それをオーラル・ヒストリー(口述歴史)としてまとめることは意義のあることだろうとアドバイスをいただいた。実際に地下水等へウランの粉塵が溶け出し放射能汚染が広がっているおそれもあるが、それに関する調査もない。しかしまずは私にできそうなこととして、地元先住民のインタビューにより鉱山がコミュニティーへもたらした影響をまとめてはどうかということをご教示いただいた。

そして日本へ帰国する直前にロビンソン氏の紹介により、ラグナ・プエブロで元ウラン鉱山労働者の方と連絡がとれ、急遽インタビューを行うことができた。それは帰国1日前であった。Alvino Waconda 氏は現在ラグナ保留地内にある唯一の中学校で施設関係の仕事をしており、学校に訪問して彼のオフィスで鉱山での労働経験等をインタビューさせていただいた。そして近くの小学校の先生をしている女性も彼と同じくウラン鉱山の被曝について活動してい

るグループのメンバーだということで、わざわざ彼のオフィスに呼んで下さり同時にインタビューを行った。

さらに「ラグナ・トライブ政府のガバナーオフィスがあと15分で閉まるけれども(その時あと15分で夕方5時になるかという時だったが)、すぐ近くだから行ってみよう」ということになり、Waconda氏に車で連れて行っていただいてラッキーなことにガバナーと接見することができた。それで私のウラン鉱山に関するオーラル・ヒストリープロジェクトを説明し、正式に日本よりガバナー宛てに手紙を書いてリクエストし、それがもしもトライブ政府に承認されたならば調査許可がもらえるかもしれない、というところまでこぎつけることができた。

その後はWaconda氏の住んでおられる、鉱山より最も近いポアティ村へ案内していただいた。そしてほぼ夕暮れ(午後7時半頃)まで鉱山の概容を間近で説明していただき、実際にこの目で鉱山の詳細を確かめることができた。

最後の最後で飛躍的に調査が進展したと考えている。本調査を行うにあたっては、保留地内で人間関係をより築くことが重要だと認識した。この後あまり期間を空けることなく手紙を書いて、まずは調査許可を得、再び調査地に赴くことができればと願っている。

5 海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

実は勉学・研究以外の活動はほとんどする余裕がなかったと言ってもいい。というのは、私は当時4歳の娘と1歳の息子を同行しており、毎日彼らの世話をし生活するだけで精一杯だった。子供達は月曜日から金曜日まで大学の近くの私立保育園に預けて、その間だけが基本的に私が研究に従事できる時間だった。

海外派遣最終日のインタビュー調査などは、一旦調査地に赴くと夕方保育園へ迎えに行く時間に間に合わないのので子供二人連れで強行し、インタビュー最中に下の赤ん坊が眠くてあまりに泣き叫ぶので母乳をやりながら質問等を行ったり、上の娘は娘で「お腹へった！」とインタビューに答えてもらっている途中に大声で叫んだりして、Waconda氏が同情してバナナを下さったりという、まさにハプニングの連続だった。

そんな状況の中で4月28日(金)夜だけは、大学キャンパス内のPITと呼ばれる屋内運動施設の中で行われたPow Wowと呼ばれるアメリカ先住民のダンスを競うお祭りを子供達と見に行った。このパウワウはかなり規模が大きく、全米から色とりどりの衣装で着飾ったダンサー達集まって様々なカテゴリーの踊りを披露していた。

それ以外には研究にも間接的に関係するのだが、アルバカーキにある環境市民NGO、Citizens for Alternatives to Radioactive Dumping (CARD) を訪問した。たまたま私に滞在先の家を紹介してくださった人のオフィスで、ニューメキシコ州内の放射性廃棄物処理の安全性について疑問を投げかけている市民NGOである。州内で軍事施設より排出される放射能廃棄物の輸送に関してそのルートや安全性について情報を地元住民に知らせたり、放射能関連の情報公開について裁判で争ったり様々な活動をしている。個人的にもそのNGOのメンバーになって継続的に交流をしていきたいと考えている。

また現地の生協であるLa Montanita Food Coopでアメリカでのオーガニック食品についても調べた。それは私の家が有機農業を営んでいるからだが、この生協は環境問題に大変関心があり、SRICやCARDを支援している市民の横のネットワークのシンボリックな役割を果たしている団体であった。その支店の一つでマネージャーをしているMichelle Franklinは7年前からの友人で、彼女の協力を得てアルバカーキの環境NGOについて次回調べる予定である。

6 海外派遣費用について

私個人の渡航費は大阪・アルバカーキ間が121520円で、子供達の渡航費用は12970円であった。アメリカ滞在中ユタに行く移動があったので、それには一人あたり21471円(×2人)かかった(長男の分は不要)。レンタカーは高く、合計139200円を要した。それに伴うガソリン代は、12804円だった。約1ヶ月の生活費は、最初のホテル代が8625円(2泊)で、その後見つかった家の家賃が2ヶ月分で92000円だった。食費は約27686円を食材購入にあてほとんどを自炊していた。子供の保育園料は3週間で登録料を含め73025円で、高額だとは思ったが致し方ない出費であった。また現地は日本で想像していたよりもずっと暑く、夏物の衣料を購入する必要がある。その他、紙おむつなど子供に関する費用が思ったよりもあった。私の資金計画では総研大からの補助以外には、個人の準備金として学生支援機構よりの奨学金を不足分として本海外派遣に伴う費用にあてた。なお、海外学生派遣事業経費内訳では1ドルを115円として計算している。

7 海外派遣先での語学状況

英語を使用。派遣前に特に TOEFL 等の試験は受けていない。日常生活を送る上では支障は全くなかったが、インタビュー調査を行うにあたっては、質問等言葉につまることが多々あった。アメリカで修士をとったのが6年前で、修士取得後すぐに帰国して以来英語を話す機会がほとんどなかったため、言葉の感覚を取り戻すのに時間を要した。

8 海外派遣先で困ったこと

困ったことは、やはり二人の子連れで渡航し調査を行うことの難しさである。これは極めて個人的な事情ではあるが、これから海外派遣を希望する他の後輩の方でも私と似たような事情を抱えることが今後ないとも限らないので書き添える。

小さな子供を伴って旅行するのでベビーカーを含めて荷物は当然多くなり、まず移動が大変であった。飛行機の中でも片道9時間以上、乗換えを入れると13、14時間かかるので、機中いかに他の人の迷惑にならないようにするかを親としては大変気を使う。1歳の息子は眠くなるとぐずるので、飛行機の後方で立って抱っこしてあやして寝かしつけようとし、それでもだめな場合はとにかく母乳をやって泣き声が出ないように口をふさぐ。その間4才の娘がどこかへ行かないようにおもちゃやら絵本やら与え、現地に到着してからはレンタカーを利用したので、車に乗せてしまえば子供はおとなしくなることが多いので楽であるが、その分費用は当然ながらかかってしまう。

宿泊先も一人と違って、子供にファーストフードが多いアメリカで外食を頻繁にさせるわけにはいけないので、料理ができるキッチンをついた場所を探すとすると選択肢は限られる。だがたまたま友人の紹介で、今回は私達親子が滞在中、家主が旅行をして部屋をサブレットという形で短期間だけ間貸してくれるという場所が見つかり助かった。

また、子供同伴であると一番問題なのが、子供の面倒をみってくれる保育園探しである。私以外に誰が子供をみってくれるかということで、ベビーシッターを雇うということも考えたが、今回は民間の保育園を利用した。2人で1週間200ドルかかり、まる3週間預けた。上の子(4歳)は英語が全くできずに最初どうなることかと思ったが、第1日目だけトイレを言い出せずに私が迎えに行くまでずっと1日中我慢していたようだったが、2日目以降は大丈夫で、最後の1週間ではすっかり慣れて保育園の環境を楽しんでいるようだった。下の子(1歳)は今まで一度も預けられたことがないので当初から泣き続けで、3週間目によく慣れてきたかというところで保育園を離れなければならなかった。

9 海外派遣を希望する後輩へのアドバイス

私のように子連れで海外へフィールド調査に行く人が今後そう頻繁に現われるとは思えないが、もしもどうしても子供を連れて行かなければならない場合は、かなりの覚悟が必要になると実感する。自分のことだけでなく、子供の安全、健康面でのケア、慣れない環境での子供の精神面でのケア、例えば事故等の突然の事態に対する準備(心構えも含めて)など、気になることを数え上げればきりが無い。また思いがけないことに遭遇するおそれは一人で渡航する以上にはるかに多く存在する。そういった場合、どう対処するのかということに対して、私はおそらく準備不足であったであろうが、幸いにして今回の海外派遣ではラッキーな出会い、状況が随分重なったであろうと思う。私は現地で多くの人に寄りかかり、何より大変お世話になった(おそらく大変なご迷惑をおかけしたことだろうと思う)。一人ならまだしも二人の子供を連れていくことは、上の4歳の娘に最大限1歳の弟の面倒をみさせ、また見ず知らずの親切な人のご厚意に甘えることではじめて成り立ちできたことである。

私の場合、私以外に子供の面倒を常時みることのできる人がいない。子供の父親はいるが農業をしており、一緒に渡米するわけにはいかない。さらに子供を日本に置いていって彼が面倒をみることができる状況にもない。特に乳飲み子の世話ができない。また私達の両親達も働いており、同居しているわけでもないので、子供を連れて行くしか私自身がフィールドワークへ行ける方法はない。まさにシングルマザー状態である。

しかしこのような無い無いづくしの状況でも行くことは可能であるというのがわかって嬉しい。子供のことを第一に考えると一緒に連れて行くのはどうしても躊躇してしまうことが多いだろう。不安にならない母親などいないとも思う。しかしあきらめないで行こうとする意志を貫くならば、きっと助けてくれる人は現れるし、不安定な変化の多い環境の中でも子供達はたくましく育てゆく。いやむしろ子供達に助けられることさえ多い。私の調査地である先住民保留地では、どこへ行っても子供連れを歓迎してくれることが多かった。私の調査の内容などどうでもよく、子供を可愛がって遊んでくれる人が多くいた。子供達を通じて知り合いになったり、アジア人の観光客など一人もいないような状況の中で、「何でこんな所に子供と一緒に来たのか?」と尋ねられ、そこから話題ができ会話できたりすることもあった。

現在、地域文化学専攻および比較文化学専攻には私の子供を含めて3人の赤ちゃんを持つ学生がいる。両専攻とも20代後半から30代の女性が多いから、子供を産むあるいは産む可能性のある人が多く在籍する。しかし研究をするにあたって子供はどうしても足手まといになるというので、産み控えるか産んだ後も研究を一端中断する人が多くいるのではないかと考える。子供がいると実際時間と手間が非常に取られるので、研究に従事しない方がいいという暗にプレッシャーがかかることも事実である。これは海外派遣事業に限ったことではないのだが、大学院生を子連れで続け、フィールドワークに出るということに関して、たとえ私が研究に満足に時間をとれるような状況にはなくても、長い目で自分の研究に意欲を持ち続けそれを遂行しようとする意志があるならば、子供は足手まといではなくてむしろ伴侶(のようなもの)であって、共に助け合いながら研究を続けていくその過程をより豊かにしてくれるファクターではないかと私は思っている。よって後輩へのアドバイスとしては、「どんどん産んで」とは言えないが、子供がいても一緒に研究や調査を行うことができる一事例として私の経験を伝えることができると考えている。とはいえ私の調査もまだ始まったばかりなので、これがうまく完了できるかどうかわからないのだが、望みだけはもって頑張っていきたいと考えている。

ということで不慣れではありますが、以上を終了報告書とさせていただきます。

玉山 ともよ